

## F.M. ドストエフスキーの『おとなしい女』と『おかしい男の夢』

### “A Gentle Creature” and “The Dream of a Ridiculous Man” Written by F.M. Dostoevsky

木寺 律子

KIDERA Ritsuko

**要旨:** F.M. ドストエフスキー (1821-1881) の短編小説『おとなしい女』 (1876) と『おかしい男の夢』 (1877) はどちらも個人雑誌『作家の日記』に掲載されている。これらの作品はわずか半年の間に相次いで書かれ、内容にも類似点が多い。しかし、この二つの作品には、聖書の言葉を引用して正反対の結論が書かれている。この二つの作品を比較考察することで、類似する作品に異なる結論が書かれる背景を探りたい。二つの作品には実は、時事問題や社会問題を扱う『作家の日記』の他の記事との関連が隠れている。当時のロシアでの自殺の急増や、特に無神論的知識人の思想家ゲルツェンの娘リーザの自殺の問題を扱った記事が、二つの文学作品にどのように関連しているかを検証する。

**【キーワード】** ロシア文学、F.M. ドストエフスキー、A. ゲルツェン、自殺、聖書

**Abstract :** “A Gentle Creature” and “The Dream of a Ridiculous Man” written by F.M. Dostoevsky are published in the journal “A Writers Diary”. These two works are written only for a half years and they have many similarities. But on the finish of these works Dostoevsky quotes the words from the Bible and write the opposite conclusions. I would like to compare these two works and try to understand why similar works have the different conclusion. I think that there is the relation with other essays on “A Writers Diary” in these two short stories. I would like to study this relation of these two novels and the essays about the social problem of increasing suicide in the Russia of these days, and especially Liza’s suicide, who is the daughter of atheistic intelligentsia A. Herzen.

**【Keywords】** Russian Literature, F.M. Dostoevsky, A. Herzen, Suicide, Bible

#### 1. はじめに

F.M. ドストエフスキー (1821-1881) の小説『おとなしい女：幻想的な物語<sup>1)</sup>』 (1876) と『おかしい男の夢：幻想的な物語<sup>2)</sup>』 (1877) はどちらも作家ドストエフスキーが自分で発行していた個人雑誌『作家の日記』に収められている。『おとなしい女』は主人公の男が若い妻と結婚するものうまくいかずに、妻を追い詰めて自殺させてしまい、男はそのことを回想しているうちに真理にたどり着く物語であり、『おかしい男の夢』は主人公のおかしい男が自殺を計画するものの自室で眠り込んでしまい、夢の中で自殺して他の惑星へ行き、そこでの生

活を経験し、夢から覚めた後には真理を発見して自殺をとりやめるといふ物語である。どちらの作品も主人公の男の独白のみによって成り立つ短編小説で、小説の副題はどちらも「幻想的な物語」(Фантастический рассказ) である<sup>3)</sup>。『おとなしい女』でも『おかしい男の夢』でも、**真実 (истина)** という言葉が繰り返し登場していて、どちらも真実を追求する作品であるといえる。『おとなしい女』は1876年11月、『おかしい男の夢』は1877年4月に発表されているので、これらの作品はきわめて近い時期に書かれたことになる。

ふたつの小説は、最後が聖書からの引用で締めくく

れているという点でも似通っている。ところが、この聖書からの引用の解釈では、正反対の結論が示される<sup>4)</sup>。

『おとなしい女』では、

「人々よ、互いに愛し合いなさい」——いったい誰がこんなことを言ったのだ？これは誰の遺訓なのだ<sup>5)</sup>？

という、愛が不可能であることに対する怒りが書かれ、『おかしな男の夢』の最後には

肝心なのは、自分自身を愛するように他人を愛せよ<sup>6)</sup>ということだ、これが肝心なことで、これがすべてだ、ほかには何も無い。このようにしさえすればすぐに、うまくいく。これは、10億回も繰り返され、読みあげられてきた古い真理でしかないんだが、ただ、なじまなかつただけなんだ<sup>7)</sup>。

として、他人を愛することは簡単だとされる。わずか半年の間に書かれ、多くの類似点を持っている二つの作品の間に、聖書という同じ書物を引用しながら正反対のことが書かれるのはなぜだろうか。

本論ではまず『作家の日記』に載っている他の記事との関連に着目してこの二つの作品を検討し、さらにこれらの作品に異なる結論が描かれるわけを考察したい。

## 2. 二つの文学作品と『作家の日記』の他の記事の関連

『おとなしい女』と『おかしな男の夢』は独立した文学作品であるが、それと同時に、雑誌『作家の日記』に収録されているほかの論文や記事との関連がある内容を扱っているという側面も持っている。『作家の日記』には、当時の社会で実際に起こった事件や、それについてのドストエフスキー自身の考えが連載されているが、記事や論文の形式とは異なる小説の形式によって時事問題に対するドストエフスキーの考えを表現するのが、『作家の日記』全体における『おとなしい女』や『おかしな男の夢』といった小説の役割でもある<sup>8)</sup>。

『作家の日記』ではさまざまな社会問題、時事問題が取り上げられているが<sup>9)</sup>、『おとなしい女』と『おかしな男の夢』の内容に直接関連を持っているのは、なによりも自殺問題を扱った一連の記事であろう。

ドストエフスキーは当時のロシアにおける自殺の急増という社会問題に強く関心を寄せていた。そもそもドストエフスキー文学では登場人物の自殺が多く描かれていて、自殺のテーマは『おとなしい女』と『おかしな男の

夢』に限ったものではないが、ドストエフスキー文学における自殺のテーマや実際の自殺事件に対するドストエフスキーの関心については、イリーナ・パペルノ (Irina Paperno) が詳述している<sup>10)</sup>。ウラジーミル・エフレーモフ (Владимир Ефремов) もドストエフスキー文学における自殺の問題を考察している<sup>11)</sup>。ドストエフスキー文学における自殺の問題は神の問題や罪の問題などとの関連で考察されることが多い。しかし本論では『作家の日記』に焦点を絞って、この雑誌に描かれる自殺の問題とふたつの文学作品との関連を考えたい。

## 3. 社会問題としての自殺事件

『作家の日記』では、『おとなしい女』が収録される少し前の「1876年10月1章」に、「単純さと単純化についての二、三の短評」、「二つの自殺事件」、「判決」という記事が掲載されている。

「単純さと単純化についての二、三の短評」では、ロシアの社会問題が取り上げられ、この記事の最後には次のように書かれている。

これは我が国の、相互の、長い間にますます大きくなっていく、一つのロシアともう一つのロシアとの乖離から生じているのだ。我々の乖離はまさに一つのロシアのもう一つのロシアに対する見解の単純さに起因する。こうしたことが始まったのははるか昔、周知のように上流階級のロシアの民衆のロシアに対する見解の、尋常ではない単純化が最初に行われたピョートル時代のことで、それ以来、世代から世代へと引き継がれて、我が国ではこの見解がひたすら単純化され続けてきたのであった<sup>12)</sup>。

この「ふたつのロシア」、すなわち西欧風の生活を送る人々から成る上流階級のロシアと、民衆のロシアのイメージは、次の「ふたつの自殺」の章に引き継がれていく。「ふたつの自殺」の章では、知識人の娘の自殺と、貧しさのあまり死を選んだ民衆の娘のことが取り上げられている。ドストエフスキーは知識人の娘のことを「ある亡命者の娘」と紹介しているが、ある亡命者とは無神論的知識人で社会主義を志向し、ポーランドのロシアからの独立運動を支援したり、ロシアの農奴制廃止を訴えたり、因習的な家族制度・婚姻制度の廃止を訴えたりして、パリに客死したアレクサンドル・ゲルツェン (1812-1870) のことであり、自殺したのはその娘リーザであるというのはすでに知られている。彼女の遺書には、以下のような斜に構えた文章が書かれていたという。

「もし自殺が成功しなかったら、みんな集まって私が死者の中からよみがえったことを祝ってクリコのグラスで乾杯するといいわ。でももし成功したら、一つだけお願いしておきますけど、私が完全に死んだことを十分確認してから、埋葬するようお願いいたします。なぜって、土の下の棺の中で目を覚ますなんてとても嫌なんです<sup>13)</sup>。」

一方で、民衆の娘は、建物から飛び降りるときに、聖像を抱えていたということである。ドストエフスキーはこれについて次のように書いている。

しかし、それにしても、この二人の人間はなんと異なっているんだろう、まるで二人とも別々の惑星からでもやってきたようではないか<sup>14)</sup>！

ふたつのロシアの違いはふたつの自殺に象徴されてきたが、さらにふたつの別々の惑星に例えられている。さらにその後の「判決」の章では、人生の意義について悩んで自殺した人物が「退屈のあまり自殺した唯物論者<sup>15)</sup>」として紹介される。この男は人間の意識の問題を強調しながら、幸福の問題も考察している。

「しかし、もし意識的に選択するならば、私はやはり自我が存在する間のみ幸福であることを望むだろう。全体やら調和やらということは、自我が消滅してしまえば——私の死後にこの世にこの調和を保った全体というものが残っているのか、それとも私と一緒に消え失せてしまうのかは、私にはどうでもいいことだ<sup>16)</sup>。」

この人物は宗教や人生の問題に科学的な思考を取り入れることを好み、世界を、単に世界や神の調和としてのみではなく、「惑星」として捉える面がある。

「だって我々の惑星も永遠のものではなく、人類にも定められた期限がある、ちょうど私にそのような瞬間があるのと同じようにだ<sup>17)</sup>。」

#### 4. 現実の事件に対する文学作品『おとなしい女』の応え

『おとなしい女』の主人公の妻の自殺は、聖像を抱えて飛び降りるというものであった。これは「二つの自殺」で紹介された実際にあった自殺事件のうちの、貧しい暮らしをしていた娘の自殺と似通っていて、ドストエフスキーが実際にあった事件からヒントを得て『おとなしい

女』を創作したことはすでに広く知られている。

スヴェトラナ・スラフスカヤ＝グラニエ（Светлана Славская-Гренье）は、小説『おとなしい女』の根底にはアレクサンドル・ゲルツェンの思想への批判があることを指摘している。S.グラニエによると、「二つの自殺」の章でゲルツェンの娘リーザが自殺したことが紹介され、ドストエフスキーはゲルツェンの無神論的な世界観の結果としてリーザの自殺が起こったと考えているが<sup>18)</sup>、そもそもそれ以前の「単純さと単純化についての二、三の短評」の章で述べられる考えもゲルツェンの思想への批判であり、小説『おとなしい女』はゲルツェンの小説『誰の罪か?』（1846-47）への批判を含んでいる<sup>19)</sup>。S.グラニエは『誰の罪か?』における主人公ペリトフの職業と『おとなしい女』の主人公の男の職業が同じ高利貸であること、どちらの小説でも不倫問題や主人公の死を扱いながら『誰の罪か?』ではこれらの出来事について最終的に誰にも罪を負わせないのに対して『おとなしい女』では主人公の男の責任が追及されていることなどを詳細に考察しているが、本論にとってとりわけ重要なのは、『作家の日記』の中の「単純さと単純化についての二、三の短評」、「二つの自殺」、「判決」といった一連の章と小説『おとなしい女』の間には内容的な関連があるということである。この指摘を受けて本論ではさらに、『おとなしい女』以降にもこのテーマは引き続き『作家の日記』に現れていること、『おかしな男の夢』も一連の記事や『おとなしい女』と関連していることを述べていきたい。

#### 5. 『おとなしい女』以降の『作家の日記』

ドストエフスキーは小説『おとなしい女』執筆の後にも、現実の自殺事件に言及している。『作家の日記』では、その後の1876年12月にも「遅ればせの教訓」、「根拠のない主張」、「若者たちについて一言」といった一連の章で自殺問題が扱われている。

ドストエフスキーが退屈のあまり自殺した男を紹介したことについて、『作家の日記』の読者の一人であるエヌペー氏がドストエフスキーに寄せた意見が「遅ればせの教訓」の章で取り上げられる。

エヌペー氏は論理的自殺を行った人は同情に値しないことを次のように書いている。

ドストエフスキー氏の『日記』に書かれているような、考察つきで死んでいく自殺者は皆、全く哀愍に値しない。これは粗野なエゴイストで見栄っ張り人間社会の最も有害な一員である。彼は自分が世間

の話題になるのであれば、その愚かな行為を敢行することさえできない。彼は自分の役割、その見せかけの性格を守り通すことさえできない。彼は考察など全然なしに簡単に死ぬことができたにもかかわらず、考察なるものを書いている…<sup>20)</sup>

ドストエフスキーは、自分はエヌペー氏が言うように哀惜のために自殺者を紹介したのではなく、エヌペー氏のように複雑な問題を単純化して考える「直線的<sup>21)</sup>」な思考こそが問題なのだと返答している。

次の「根拠のない主張」の章で本格的にエヌペー氏に反論するにあたって、ドストエフスキーは靈魂の不滅の問題に言及する。この章では、もはや動物的な欲求だけから生きることができなくなった人々が哲学的問題から「論理的自殺」(логическое самоубийство<sup>22)</sup>)をするのを止めるには、人間の靈魂の不滅に対する信念が不可欠であることが繰り返し強調されている。穏健な保守派で、帝政ロシアの軸であったロシア正教を信奉する晩年のドストエフスキーの、キリスト教徒としての立場が明確にされる文章である。

最高の理念なしには人間も国民も存在することはできない。地上における最高の理念はただひとつしかなく、それはほかでもない——人間の靈魂は不滅であるという理念である。なぜならば、人間の生活を可能にする、それ以外の人生の「最高の」理念はすべて、ただこの理念だけから流れ出ているからである<sup>23)</sup>。

ドストエフスキーは、退屈から自殺した唯物論者が靈魂の不滅の代わりに信じようとした「人類に対する愛」は、自分自身が無力だと感じたときには機能しないこと、心の中に抱いている人類に対する愛情が人類に対する憎悪に変わることもありえることを説明している。

彼はそれ(人生との和解の方法のこと——執筆者注)を「人類に対する愛」(любовь к человечеству)の中に見つけようとした。「僕はだめでも、人類はひょっとすると、幸福になり、いつかは調和を達成するかもしれない。この思想なら僕を地上に引き止めることができたかもしれない。」と彼はうっかり口をすべらせている。そして、もちろん、これは自己犠牲的な思想、自己犠牲的な受難者の思想である<sup>24)</sup>。

私は、人類に対する愛は一般的に、理念としては、人類の知恵にはもっとも理解しがたいもののひとつであると確信していて、公言してはばからない。まさに理念としてである。これを正しいと認めるのはただ感情だけである。しかし、この感情も人間の靈魂は不滅であるという確信が伴う場合のみに可能なのである<sup>25)</sup>。

これも、広義においてゲルツェンの思想への批判となっており、ゲルツェンの無神論思想を否定してロシア正教の信仰を重視するドストエフスキーの考えに沿うのであろう。

「若者たちについて一言」の章では、若者たちの間で自殺が流行しているのはその父親の世代にも責任があるが、その一方で若者たちの状況は父親の責任をはるかに超えるようなものであり、そもそもロシアにおける上流階級と民衆の乖離が知識人を苦しめていることが述べられている<sup>26)</sup>。これは、当時のロシアの若者たちの自殺の原因をゲルツェンの思想のみに帰すのではなく、ゲルツェンの娘の死の責任をゲルツェンのみに帰すのではない<sup>27)</sup>とドストエフスキーが考えているとも受け取れる。

「自殺について。または思い上がりについて」という章では再びゲルツェンの娘の自殺問題が取り上げられている。ドストエフスキーはエヌペー氏に反論しながら、ゲルツェンの娘リーザや退屈から自殺した男のように生活の苦勞があるわけでもないのに論理的自殺を行った人もやはり大変苦しんだはずであり、彼らに対しては「もっと人間愛に満ちた態度(человеколюбивее)で接すべきである<sup>28)</sup>」と2度にわたって語っている。

このようにドストエフスキーはエヌペー氏からの批判を受けて、エヌペー氏に反論しながら自説を展開し、自分の「論理的自殺」に対する立場をより明確にしているのである。

ただし、ここで疑問が起こるのは、靈魂の不滅への信仰なしには実現しがたく、これのみでは論理的自殺を食い止めることはできないとドストエフスキーが指摘した「人類に対する愛」と、論理的自殺を行おうとする者に対して周囲の人々がとるべき「人間愛に満ちた態度」は、同様のものではないかということである。周囲の人々が論理的自殺者に対して人間愛に満ちた態度をとることができるのは、周囲の人々が靈魂の不滅への信仰を持っている場合なのであろうか。靈魂の不滅への信仰なしに人類に対する愛を実現するのは困難で、人類に対する愛では論理的自殺を食い止めることができないにもかかわらず、論理的自殺をする人々を周囲の人々が止めるにはや

はり人間愛に満ちた態度が必要なのであろうか。理念としての人類に対する愛は困難であるが、人間愛に満ちた態度は感情なので実現可能なのであろうか。ドストエフスキーは霊魂の不滅への信仰をより重視しているものの、「人類に対する愛」を決して完全に捨てきったわけではないようである。エヌペー氏の「直線的」な思考とは異なるドストエフスキーの論理展開は一筋縄ではない。

## 6. 『作家の日記』の記事を受けての『おかしな男の夢』

このようにドストエフスキーは『おとなしい女』執筆後にも自殺問題を考察し続け、その後、小説『おかしな男の夢』を書く。

『おかしな男の夢』の主人公の男は、自殺した後もかすかに意識があり、人々が自分を棺に入れて運び出す様子や、自分が土の中に埋葬される様子を感じ取る。彼は墓の中で身動きもとれずに長い時間を過ごす羽目になる。この場面の描写は恐怖感を伴うものというよりも滑稽なものである。

僕は横になっていて、不思議なことに、死人には期待することは何もないということ素直に受け入れて、何も期待しなかった。しかし湿っぽかった。それからどのくらい時間がたったか、——1時間か2、3日か、それとももっとたくさん日にちがたったのか、それは僕には分からない。しかし突然、閉じていた僕の左目の上に、棺の蓋を通してしみ込んだ水が一滴落ちてきた。それから一分ほどしてまた一滴、さらに一分ほどしてまた一滴、つづいてポタリまたポタリと、水滴はきちんと一分おきに落ち続ける。激しい怒りが突然僕の胸の中で燃え上がり、そして突然僕は胸のあたりに肉体的な痛みを感じた。『これは僕の傷口だ』と僕は考えた。『そこは僕が弾丸を撃ち込んだところで、そこに弾丸が入っているのだ…』水滴は相変わらず一分ごとに閉じた僕の目の上にまともに落ちてくる<sup>29)</sup>。

「二つの自殺」の章で取り上げられたゲルツェンの娘リーザの遺書の「土の下の棺の中で目を覚ますなんてとても嫌」という皮肉な言葉は、『おかしな男の夢』の主人公の身の上に文字通りに実現する<sup>30)</sup>。

おかしな男はこの後、墓から出て宇宙を飛び、別の惑星へ行く。「二つの自殺」の章の最後の「二人とも別々の惑星からでもやってきた人間のように」という惑星の比喩は、『おかしな男の夢』の中にこの地球と地球によく似た第二の惑星が出てくることにつながっていく。自殺

したゲルツェンの娘が不快なことだと考えた通りに墓の中で目を覚ましたおかしな男が、夢の中で二つの惑星の間を旅して、どちらの惑星も素晴らしいことを認識し、その結果自殺を取りやめる様子を描くことによって、ドストエフスキーはゲルツェンの娘の自殺前の遺書の内容に反論しようとし、さらに二つのロシアや二つの自殺、二つの惑星の間の乖離をも乗り越えようと試みた。

おかしな男は小説の終わりに次のように叫ぶ<sup>31)</sup>。

「生の意識は生より尊く、幸福の法則の知識は——幸福そのものよりも尊い」——これと戦わなければならないのだ！僕はやる<sup>32)</sup>。

このおかしな男の叫びは、夢の中で見た別の惑星の住人たちが科学的発展を遂げて墮落した後に、「幸福についての知識は幸福より尊い<sup>33)</sup>」と語り始めたことを受けているようであり、確かに小説の中でおかしな男は繰り返し人間の意識の問題を提起していて、夢の中で人々の幸せについても考えている。しかし、小説『おかしな男の夢』の内部では、この問題が深く考察されているというほどでもないため、いささか唐突な結論だという印象を与えないでもない。この結論を、『作家の日記』全体において退屈から自殺した唯物論者の幸福についての意識についての考えと比較すると、おかしな男の発言の主旨は明快になる。意識の問題を重視したために、自我が消滅した後の世界や調和はどうでもいいと考えて自殺するに至った、退屈から自殺した唯物論者におかしな男は反論しているのである。小説の冒頭でおかしな男が考えている世界や自我の問題も、退屈から自殺した男の考えと類似する。おかしな男が夢の中で他の惑星に行き、そこでも生活を経験するのにも、退屈から自殺した唯物論者の「我々が住むこの惑星にも期限がある」という考えに対する反論として、別の惑星の存在を提示していると考えられる。

このようにおかしな男は、ゲルツェンの娘リーザの遺書への反論だけでなく、「判決」の章で描かれる退屈のあまり自殺した唯物論者が抱えていた問題への反論をも提示している。

『作家の日記』における一連の自殺問題を扱う記事に対して、『おかしな男の夢』では、『おとなしい女』以上に発展した考えが述べられる。ドストエフスキーは『おかしな男の夢』を書くことによって、人々を「論理的自殺」に至らしめる精神的な苦しみを和らげようとした。

『おとなしい女』では、生活上の苦勞から自殺する民衆への同情と、単純化した論理によって人を自殺に追いや

る無神論的な発想への批判を表明したが、『おかしな男の夢』ではさらに知識人階級の人々が犯しがちな「論理的自殺」をも防ごうとした。

このように短編小説『おかしな男の夢』は、『おとなしい女』では未解決のままに残っていた問題を克服した作品であるといえる。

### 7. 『おかしな男の夢』における人類に対する愛

『おとなしい女』の最後に明らかになる真理とは、自分が妻を追いつめたのだということと、人を愛することの困難さであり、『おかしな男の夢』で書かれる真理とは、人を愛することは可能でありしかも簡単だということである。これらの作品における「真理」はロシア正教の思想における意味合いが強く、『おかしな男の夢』における真理の問題についてはV.カタソノフ（Владимир Катасонов）が、黄金時代などの他の概念との関連で詳しく論じている<sup>34)</sup>。また、『おかしな男の夢』において「真理」（истина）が17回出てくると、ドストエフスキーの他の作品と比べても、「真理」（истина）という言葉が登場する回数は『おかしな男の夢』が圧倒的に多いこと、「真理」（истина）は「真理」（правда）とは異なる用法がなされていることは、『おかしな男の夢』における「真理」（истина）をキリスト教的な観点から解釈したジェラルド・サボ（Gerald J.Sabo, S.J）が指摘している<sup>35)</sup>。本論では、この「真理」という言葉の持つキリスト教的思想全般について論じるのではなく、キリスト教思想の中でもとりわけ愛の問題を「真理」が含有していることに焦点を当てたい。『おとなしい女』では、主人公の男は冷淡であり人々を愛することができないが、『おかしな男の夢』には愛のテーマが繰り返し登場している。人々を愛していることばかりを大げさな言葉で再三語ることが、おかしな男をまさに滑稽に見せている。

彼は小説の冒頭から早速、周囲の人々から嘲笑されても自分は周囲の人々を愛していることを語っている。

今では彼ら皆のことが僕にはなつかしい、彼らが僕のことを嘲笑しているときでさえも——そのときのほうがかえってなんだかなつかしいくらいだ。僕も彼らと一緒に笑ってもいい、——自分のことを笑うわけではない、彼らを愛しながら、彼らを眺めて僕があまり悲しくないならばである<sup>36)</sup>。

別の惑星に到着した彼は、自分がかつて住んでいた地球と新しい惑星を比べて考える。

「そしてあそこにあるあれが地球であるなら、それは果たして我々のと同じような地球なのだろうか……まったくあれと同じような不幸でかわいそうな、でも大切に永遠に愛しくて、我々の地球と同じように、この上なく恩知らずな自分の子供たちにさえも、やはり同じように苦しい自分に対する愛情を生み出すのだろうか？…」と僕は、自分が捨ててきた以前の地球に対する、抑えがたく感激的な愛情に体を震わせながら叫んだ<sup>37)</sup>。

彼の考えでは愛は苦悩なしには実現しないので、古い地球しか愛せないと思う。

どうして、それにまたなんのためにこのような複製がありうるのだろうか？僕は恩知らずな自分が心臓にピストルの弾丸を打ち込んで自分の生命を消し去ったときに飛び散った、僕の血しぶきの残っている、あの地球を愛している。僕が愛することができるのは、自分が見捨ててきたあの地球だけなのだ。だが、僕は一度も、決して一度もあの地球を愛するのをやめたことはなかった。あの夜、あの地球に別れを告げようとしていたときでさえも、ひょっとすると、それまでのどんなときよりももっと苦しみながら、僕はあの地球を愛していたのかもしれない。この新しい地球には苦悩はあるのだろうか？我々の地球では苦悩なしに、苦悩を通さずに、真に愛することはできない。でなければ我々は愛することができないし、それ以外の愛を知らない。僕は愛するために、苦悩がほしい<sup>38)</sup>。

しかし彼は新しい惑星の人々の愛にも強い感銘を受ける。

しかしこれらの罪のないすばらしい人々の愛の感覚は、永遠に僕の心に残り、今でも彼らの愛があそこから僕に注がれているのを感じる<sup>39)</sup>。

新しい惑星の人々が墮落して戦争や奴隷制度などを始めると、おかしな男は彼らとともに苦しむ。

僕は手をもみしぼりながら、彼らの間を歩き回って、彼らのために泣いた。しかし、ひょっとすると、彼らの顔にまだ苦悩の色が浮かんでいなかった頃、そして彼らが罪を知らず、あれほどすばらしかった以前よりも、もっと多く彼らを愛していたのかもしれ

ない<sup>40)</sup>。

『おかしな男の夢』はこのように愛に溢れる小説であるが、これは『作家の日記』の「根拠のない主張」で論じられた人類に対する愛のテーマに通じるものであろう。「根拠のない主張」でドストエフスキーは、人類に対する愛は人々には理解しがたい理念であり、人類に対する憎悪に変わることもありうる危ういもので、靈魂の不滅への信仰なしには実現しえないとしているが、『おかしな男の夢』のおかしな男は、人類に対する愛を地球の人々にも別の惑星の人々にも非常に強く感じている。「根拠のない主張」で書かれた通り、おかしな男の愛にもときには憎しみや苦しみが混じるのだが、それでもおかしな男は再び愛に立ち戻り、苦悩なしには愛せないと語る。おかしな男は夢から覚めた後には聖書を引用して信仰の問題を扱っているが、それ以前のまだ彼が信仰に立ち戻っていない時からすでに、彼は人類に対する愛を強く感じている。実現が難しいはずの「人類に対する愛」も、『おかしな男の夢』の小説世界では決して忘れ去られてはおらず、ただ否定されているだけではない。おかしな男は、退屈から自殺した男やゲルツェンの娘リーザのような人物たちの苦しみと和らげようとして、人間愛に満ちた態度を精一杯表明しているのである。

『おとなしい女』にはあまり人類に対する愛のテーマが登場しておらず、主人公の男が冷淡な態度を取る様子や妻を理解できないことが詳しく描かれ、彼は人間愛に満ちた態度を取ることができないのだが、『おかしな男の夢』では愛のテーマが強調されている。これは、『おとなしい女』から『おかしな男の夢』に至る間に、「人類に対する愛」についての作家ドストエフスキー自身の考えが深まっているためであろう。

## 8. 結論——ただ批判するだけでなく——

以上、短編小説『おとなしい女』と『おかしな男の夢』をこれらの作品が掲載された雑誌である『作家の日記』の他の記事に書かれている社会問題との関連で考察してきた。ドストエフスキーは自殺の社会問題に関心を寄せていたが、特に生活の苦勞がないのに哲学的問題から自殺する知識人階級の人々の自殺を「論理的自殺」と呼んで論じている。ドストエフスキーはこのような自殺事件が起こる背景に、当時の無神論的な社会主義思想の流行があると考えていて、『作家の日記』の様々な記事でゲルツェンの思想を暗に批判している。ドストエフスキーはまず小説『おとなしい女』を創作して人間を自殺に追いやるゲルツェンの論理の誤謬を批判したが、その半年

後に、さらに類似する小説『おかしな男の夢』を書くことで、亡くなったゲルツェンの娘リーザや退屈から自殺した男、さらには自分の論敵ゲルツェンへの想いを表現した。『おかしな男の夢』は、「論理的自殺」をする人々が信じる人類に対する愛と、「論理的自殺」をする人々に欠けている靈魂の不死に対する信仰の両方を夢によって提示する。

もっとも、ゲルツェン自身が「人類に対する愛」の概念を積極的に思想として訴えたということはない。ゲルツェンは主に、人間の自由を訴えた思想家である。ゲルツェンの活発な政治活動の基礎に人類に対する愛が見られるというのは、確かにその通りであろう。ドストエフスキーが「人類に対する愛」を見出せると『作家の日記』の中で直接指摘する箇所は、退屈から自殺した唯物論者の、自分が幸福にたどりつけなくても、他の人々が幸福にたどりつけるだろうといった考え方であり、こういった傾向はゲルツェンや当時のロシアの社会主義的な思想家にしばしば見られる。しかしゲルツェンも退屈から自殺した唯物論者も、「人類に対する愛」についてはそれほど多く語っているとは言えない。人々を愛することの困難さや人々への愛には苦悩が入り混じることはドストエフスキー文学特有のテーマで、むしろドストエフスキー自身の思想である。ドストエフスキーはゲルツェンの思想の批判から自論を展開し、無神論的知識人の思想を支える人類に対する愛を批判的に考察した。これが、ドストエフスキーが一方では「人類に対する愛」を否定しながらも、やはり「人類に対する愛」を重視している理由であると考えられる。

ドストエフスキーの晩年の思想の根幹は、無神論的なゲルツェンの思想への批判とロシア正教の信仰への回帰である。『おかしな男の夢』では主人公のおかしな男は最終的にロシア正教の信仰に到達している。しかしおかしな男がロシア正教の信仰にたどりつくというのは、ゲルツェンの無神論思想を頭から否定するというのではなく、ゲルツェンの思想に対する理解も変化してきており、ある意味ではゲルツェンの思想に対する理解がより深まってきたということではないだろうか。

## 注

- 1) 以下では、単に『おとなしい女』とのみ記述する。
- 2) 以下では、単に『おかしな男の夢』とのみ記述する。
- 3) 『おとなしい女』の冒頭の「作者から」の章では、「私は、この作品に「幻想的な物語」という標題をつけたが、私自身は、これは高次においてリアリスティックなものだと考えている。しかしここには確かに幻

想的なところがあるのであって、この小説の形式そのものにおいてそうなのである。」という断り書きがある。(Dostoevskiy F.M. Полн. собр. соч. в 30-ти т. 1982. Т. 24. С. 5. ドストエフスキーの作品や手記からの引用はすべて、アカデミー版のこの全集による。また、翻訳は執筆者自身による。) ドストエフスキーの「高次のリアリズム」の概念については多くの先行研究があるが、*Тоефуса Киносита*, По поводу понятия «реализм в высшем смысле»

Ф.М.Достоевского. В аспекте отношения поэтики и антропологии // Достоевский и мировая культура, 2009, №25, С. 103-113, *Чжан Бяньгэ*, Образ детей в романе Ф.М.Достоевского «Братья Карамазовы» и их роль в создании картины мира с точки зрения «реализм в высшем смысле» // Достоевский и мировая культура, 2009, №25, С. 227-246., *К.А. Степанян* «Сознать и сказать» «реализм в высшем смысле» как творческий метод Ф.М.Достоевского, Москва, РАРИТЕТ, 2005. などが参照できる。

- 4) これらの二つの作品の最後に、愛について対照的な発言があることは、木下豊房が『おとなしい女』を分析した際にも指摘している。木下豊房(2002)『ドストエフスキー：その対話的世界』成文社、P.130. 本論では、この二つの作品の関連をより詳しく考察したい。
- 5) *Достоевский Ф.М.* Т. 24. С. 35. 「互いに愛し合いなさい」という表現は、ヨハネ福音書13:34~35、および15:11~17にある。
- 6) レビ記19:18、マタイ19:19、マタイ22:39、マルコ12:31、ルカ10:27、ローマ13:9、ガラテヤ5:14、ヤコブ2:8に同様の表現がある。
- 7) *Достоевский Ф.М.* Т. 25. С. 119
- 8) 小説『おとなしい女』が『作家の日記』に収録されている他の自殺の問題を扱った論文と関連があることは、例えば、*М. Гурк* (М. Гург) や *Светлана Славская-Гренье* (Светлана Славская-Гренье) も指摘している。*М. Гург* Трансформация мотивов «Кроткой» в повести Ф.Мориака «Терез Дескери» // Достоевский и мировая культура, 1999, №13, С. 132-138, *Светлана Славская-Гренье* Герценовский подтекст в «Кроткой» // Достоевский и мировая культура, 2007, №22, Москва, С. 111-155. 参照。
- 9) 『作家の日記』では、小説『おとなしい女』の少し前の記事とすぐ後の記事、『おかしな男の夢』のすぐ後の記事で、合計3回コルニーロヴァの裁判のことが話題にされている。コルニーロヴァは、夫が先妻を引き合いに出して自分を非難することに悩み、妊娠中の不安定な精神状態のせいもあって、先妻の子供を衝動的に窓から落としたが、子供は奇跡的に怪我をせずに助かった。ドストエフスキーは女性の立場に対する理解の必要性を論じて、コルニーロヴァを無罪にすべきことを最初の2回で訴え、3回目の記事では、コルニーロヴァが無罪になったことが報告される。『おとなしい女』の前後と『おかしな男の夢』の直後に書かれているこのコルニーロヴァの事件も、二つの文学作品に潜在的な関わりを持っていて、裁判の思わしくない状況が『おとなしい女』の希望のない雰囲気と反映し、コルニーロヴァの無罪が確定したことの喜びが『おかしな男の夢』に描かれる希望とむすびついていると考えることもできる。また、『おかしな男の夢』の前には露土戦争についての記事が多く書かれ、ドストエフスキーは戦意を高揚させる愛国的な発言を繰り返している。ドストエフスキーが文学作品においてはポリフォニーの機能を活かして、自己の政治的発言を超える多面的なものを見方をしていることに着目すると、おかしな男が夢の中で旅する別の世界はすなわちトルコであったとも考えられる。
- 10) *Irina Paperno* (1997) *Suicide as a cultural institution in Dostoevsky's Russia* Ithaca: Cornell University Press,
- 11) *Владимир Ефремов* Самоубийство в художественном мире Достоевского, СПб, 2008
- 12) *Достоевский Ф.М.* Т. 23. С. 144
- 13) *Достоевский Ф.М.* Т. 23. С. 145
- 14) *Достоевский Ф.М.* Т. 23. С. 146
- 15) *Достоевский Ф.М.* Т. 23. С. 146
- 16) *Достоевский Ф.М.* Т. 23. С. 146
- 17) *Достоевский Ф.М.* Т. 23. С. 147
- 18) ゲルツェンの思想については石川郁男(1988)『ゲルツェンとチェルヌイシエフスキー：ロシア急進主義の世代論争』未来社、などを参照。ゲルツェンの思想と彼の家庭内の問題、ゲルツェンの娘リーザの自殺については、長縄光男(2012)『評伝ゲルツェン』成文社、p. 495. にも言及がある。
- 19) *Светлана Славская-Гренье* Герценовский подтекст в «Кроткой». С. 111-155
- 20) *Достоевский Ф.М.* Т. 24. С. 46
- 21) *Достоевский Ф.М.* Т. 24. С. 46

- 22) *Достоевский Ф.М.* Т. 24. С. 46  
23) *Достоевский Ф.М.* Т. 24. С. 48  
24) *Достоевский Ф.М.* Т. 24. С. 48  
25) *Достоевский Ф.М.* Т. 24. С. 49  
26) *Достоевский Ф.М.* Т. 24. С. 52  
27) ドストエフスキーは19世紀ロシアで、世代間で受け継がれていく思想の問題について、『悪霊』（1871）ですでに論じている。  
28) *Достоевский Ф.М.* Т. 24. С. 54  
29) *Достоевский Ф.М.* Т. 25. С. 110  
30) 『おかしい男の夢』におけるこの場面は従来、エドガ・アラン・ポー（1809-1849）の小説『早すぎた埋葬』の影響を受けて書かれたとされてきている。また、ゲルツェンの娘リーザだけでなく、作家ドストエフスキー自身も若い頃に、自分が眠っているうちに死んだと思われて葬式を出されるのではないかと真剣に恐れていたことが知られている。  
31) 『おかしい男の夢』で、別の世界への旅や別の惑星での経験が主人公の内面の問題の解決につながる様子については、木寺律子（2011）「「月に住む」：ドストエフスキーの『悪霊』と『おかしい男の夢』における科学と宗教」『EX ORIENTE』第18号、大阪大学言語社会学会、pp. 53-74参照。  
32) *Достоевский Ф.М.* Т. 23. С. 119  
33) *Достоевский Ф.М.* Т. 25. С. 116  
34) *Владимир Катасонов* Религиозные аспекты рассказа Ф.М. Достоевского «Сон смешного человека» // *Достоевский и мировая культура*, Москва, №30, Ч.I, 2013, С. 191-216., *Владимир Катасонов* Загадки «Сна смешного человека» Ф.М. Достоевского // Ф.М. Достоевский: писатель, мыслитель, провидец, Москва, 2012, С. 40-89  
35) Gerald J. Sabo, S.J (2009) *The Dream of a Ridiculous Man: Christian Hope for Human Society // Dostoevsky Studies*, New Series. Vol. XIII, pp. 47-60  
36) *Достоевский Ф.М.* Т. 25. С. 104  
37) *Достоевский Ф.М.* Т. 25. С. 111  
38) *Достоевский Ф.М.* Т. 25. С. 111-112  
39) *Достоевский Ф.М.* Т. 25. С. 112  
40) *Достоевский Ф.М.* Т. 25. С. 117  
(受付日2013年8月26日 受理日2013年10月30日)